「論理的に表現する力」を育てる国語科学習指導

福井県立若狭高等学校

はじめに

本校は福井県の南（嶺南）若狭地方（小浜市）にあり、平成十九年度に創立百十周年を迎えた歴史ある学校である。

「社会に貢献するリーダーの育成」という教育目標の実現に向けて、教育活動全般を通して「コミュニケーションする力」の育成に取り組んでいる。

平成十八・十九年度には、国立教育政策研究所「学力の把握に関する研究指定校事業」の指定を受け、研究を深めてきた。

中央教育審議会答申においても、「論理的に思考し表現する能力の育成を重視した授業の改善」が必要であることを指摘されているが、本校においては特に「論理的に表現する力」を育てる国語科学習指導のあり方について実践研究を積み重ねてきた。

「論理的に表現する力」を育てるために行った手だて

「自分の考え」を「他者と交流させる」

「自分の考え」を表現させ、「他者と交流させる」

「考え」を「他者と交流」しながら，良い意見をもらったり，コメントを書いたりする

「自分の考え」をノートに表現する

他者のノートや他者からのコメントを参考に「自分の考え」を再度表現させる

「様々なテクストを読んで考えたことを、論理的に表現する力」を育てるために、本校では前頁に示すような学習過程を数多く経験させた。

まず、様々なテクストを読んで生み出した「自分の考え」をノートに書く。

次に、その考えをクラスメートと「交流」しながら、他者の良い考えを書き留めたり他者の考えにコメントをつけたりする。

さらに、自分が書き留めたメモや、他者からのコメントを参考に「自分の考え」を再度ノートに書く。

このように、「自分の考え」を表現させ、「他者と交流させる」ことが、「論理的に表現する力」の育成につながると考え、実践を行ってきた。

左に示したのは本校二年生「現代文」の年間指導計画である。四月の「道具と文化」から、二月の「誘惑する情報」までの単元を通して、様々なテクストを読んで生みだした「自分の考え」を表現させ、「他者と交流させる」という活動を、繰り返し行わせている。

現代文(2年)年間指導計画

時期	教材	評価の規準	a	b	c	d	e
4月	考える楽しみ（評論）	・哲学に関する筆者の主張を読み取っている	○			◎	○
6月	山月記(小説)	・「李徴はなぜ虎になったのか」を、読み取っている	○			◎	○
6月 7月	道具と文化（評論）	・「道具と文化」に関する筆者の主張に対して、具体的な論拠を明確にした上で意見文を書いている	○		◎		○
9月	個性神話のパラドックス(評論)	・個人の生き方や価値観について、自分なりの考えを深め、意見文を書いている	○		◎		○
10月	学力テストの是非(新聞記事)	・学力テストの是非に関する様々な情報を収集し、活用して、進んで口頭で表現している。	○	◎			○
11月	こころ(小説)	・「なぜKは自殺したのか」を読み取っている。	○			◎	○
1月	想像としての現実(評論)	・現実と想像力との関係を、読み取っている。	○			◎	○
2月	誘惑する情報（評論）	・自分と情報との関係について、意見文を書いている。	○		◎		○

(a)は、関心意欲態度 (b)は話す・聞く (c)は書く
(d)は読む (e)は、知識 理解 の各領域を表す

具体的な実践事例

一 『考える楽しみ』(西研)

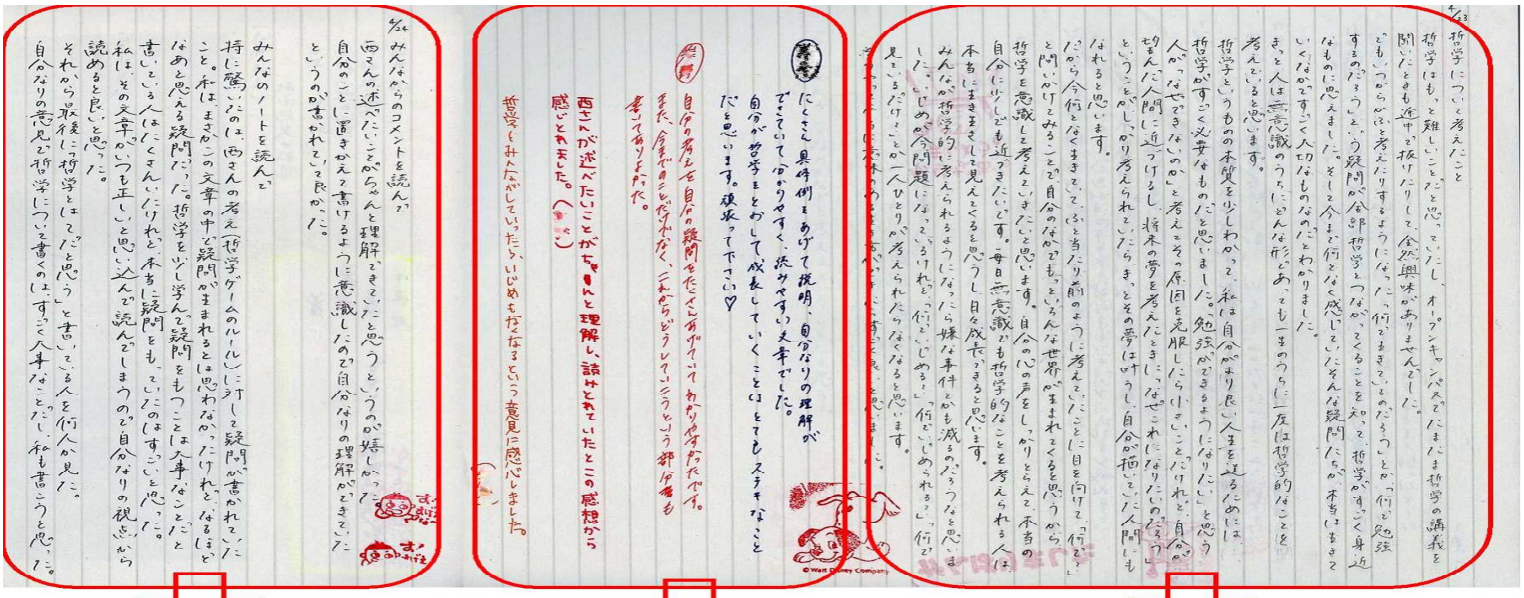
次頁に示したは、『考える楽しみ』(西研)における生徒のノート記述である。

①の部分には筆者の考えに対する、自分の意見が書かれている。

「論理的に表現する力」を育てるためには、テクストを読んで生み出した自分の考えを簡潔に書かせる機会を設けることが、きわめて有効である。

②の部分には、他者からのコメントが書かれている。この単元においては、他者の意見に対して肯定的なコメントを書くよう、指示した。

③の部分には、他者からのコメントや、他者の意見を読んで考えたことが書かれている。



哲学について考えたこと

哲学はもっと難しいことだと思っていたし、オープンキャンパスでたまたま哲学の講義を聞いたときも逃げ腰で抜けたりして全然興味がありませんでした。

でも、つからは考えたりするようになって、「何ってなんだろう」と、「何」を勉強するのだろう。という疑問が全部哲学とつながっていくことを知って、哲学がすごく身近なものに思えました。そして今まで何となく感じていたいろんな疑問たちが、本当はきちっといくらすごく大切なものだとわかりました。

また、人は無意識のうちにどんな形であっても一生のうちに一度は哲学的なことを考えていると思います。

哲学というものの本質を少しわかって、私は自分より長く人生を送るためには哲学がすごく必要なものだと思いました。勉強ができるようになりたい」と思う人が「なぜできないのか」考えるその原因を克服したら「楽しい」ことだけれど、自分の知らない人間と近づけるし、将来の夢を考えたときに「なぜこれになりたいのだろう」ということが少しでも考えられるとしたら、その夢はけっして自分が抱いている人間にもなれると思います。

だから今何となくまきて、ふと当たり前のように考えていることに目を向けて「何？」と問いかけてみることで自分のなかでもっとたくさんな世界がまれてくるのだろうから哲学を意識して考えていきたいと思います。自分の心の声をしっかりとらえて、本当の自分に少しでも近づきたいです。毎日無意識でも哲学的なことを考えられる人は本当にきまきまさしく見えてくると思うし自分も成長できると思います。

みんなが哲学的に考えられるようになったら嫌なものがなくなるような思います。

「いじめ」や「今問題になっているいろいろ」「何？」「何？」「いじめ？」「何？」と一人ひとりが考えられたらなくなると思います。

哲学はみんなが考えるべきものだと思います。

①筆者の主張に対する意見文

たくさん具体例をあげて説明、自分なりの理解ができていて分かりやすく、読みやすい文章でした。

自分が哲学をまなび成長していくことはとてもスキなことだと思います。頑張って下さい♡

自分の考えを自分の疑問をたくさん分かっていてわかりやすかったです。

また、今までのものだけでなく、これからどうしていこうという評価も書いてありとよかった。

西さんが述べたいことがちゃんと理解し、読みとれていたとこの感想から感じとれました。（ぺこ）

哲学をしみたがしていったら、いじめもなくなるという意見に感心しました。

②他者からのコメント

みんなからのコメントを読んで

西さんの述べたいことがらを理解できたと思う。というのが嬉しかった。自分のことに置きかえて書けるように意識したので自分なりの理解ができたと思う。というのが書かれていて良かった。

みんなのノートを読んで

特に驚いたのは、西さんの考え「哲学ゲームのルール」に対して疑問が書かれていること。私はまさにこの文章の中で疑問がまれるとは思わなかったけれど、なるほどなあと思える疑問だった。哲学を少し学んで疑問をもつことは大事なことだと書いている人たくさんいたけれど、本当に疑問をもっていたのはすごいと思った。

私は、その文章がいつも正しいと思い込んで読んでしまうので自分なりの視点から読めると良いと思った。

それから最後に哲学とはどんなものだと書いている人を何人か見た。自分なりの意見で哲学について書くのはすごく大事なことだし、私も書こうと思った。

③他者からのコメントや、他者の意見を読んで

以下は、このノートに書かれた具体的記述の抜粋である。

> **みんなからのコメントを読んで**
>
> 「西さんの述べたいことが、ちゃんと理解できていたと思う」というのがうれしかった。
>
> 自分のことに置き換えて書けるように意識したので「自分なりの理解ができていた」と言うのが書かれていて良かった。

この記述からは、クラスメートから肯定的なコメントが書かれたことを素直に喜んでいることがわかる。

このように、自分の考えを他者から肯定的に評価されることは、書く意欲を高めることに大きな効果がある。論理的に表現する力を高めるには、まずは「書こうとする意欲」を高めることがきわめて重要である。

> **みんなのノートを読んで**
>
> 特に驚いたのは、西さんの考え（哲学ゲームのルール）に対して疑問が書かれていたこと。（中略）
>
> 私はその文章がいつも正しいと思いこんで読んでしまうので自分なりの視点から読めると良いと思った。

この「みんなのノートを読んで」の冒頭には、他者が書いた意見文の中に、「筆者の考えを批判的に捉えたものがあった」ということに対する驚きが書かれている。

「私はその文章がいつも正しいと思いこんで読んでしまうので自分なりの視点から読めると良いと思った。」という記述からは、この生徒が、筆者の意見を肯定的に捉えることになりがちな自分自身の習慣を自覚した上で、クリティカルに筆者の考えに向き合っていくことの重要性を感じたことがわかる。

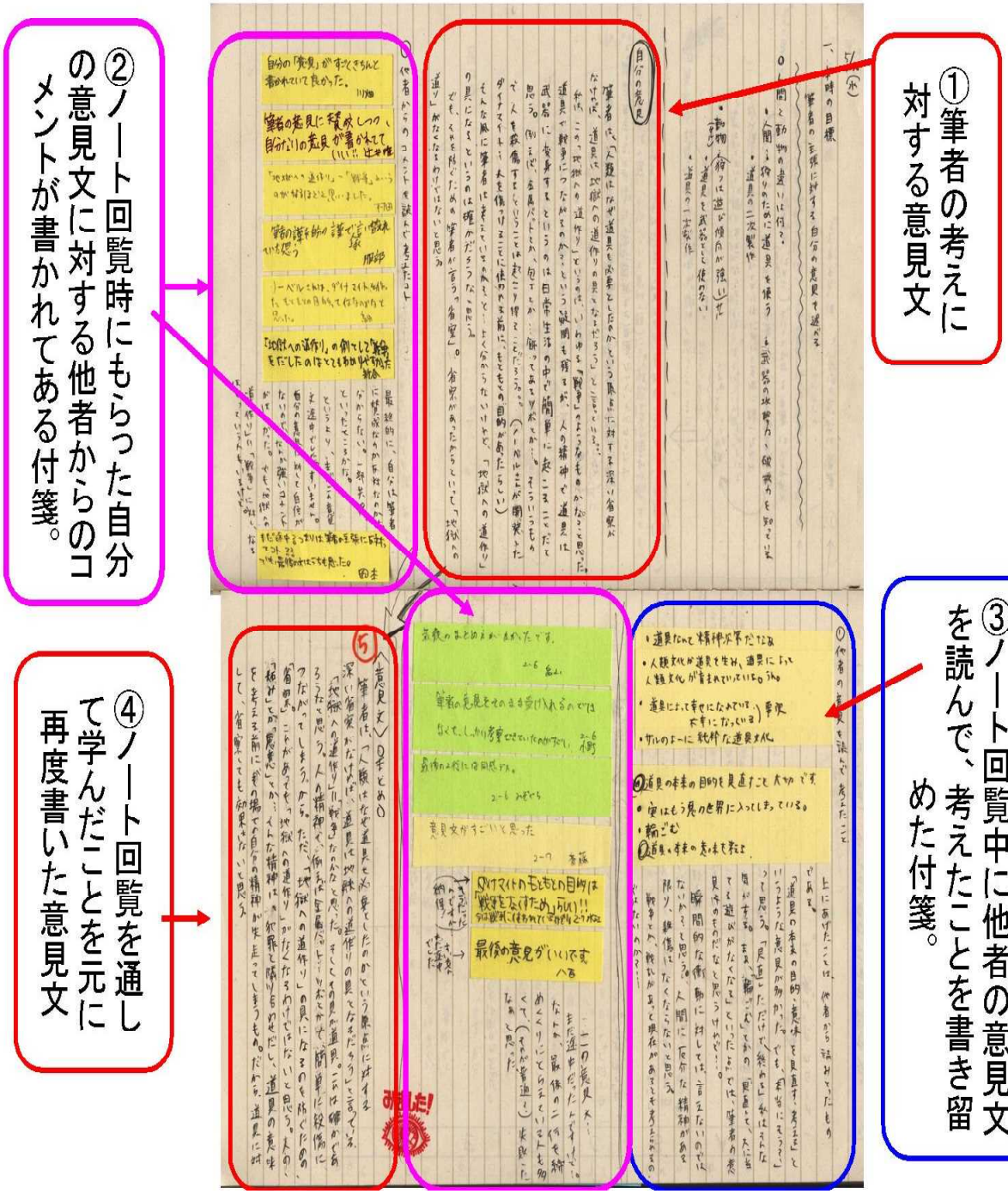
他者と意見の交流によって、自分自身の「読み方のクセ」をメタ認知し、次の学習における自分自身の課題を把握することができたのである。

「論理的に表現する力」を育てるために必要な「読む力」も、「自分の考え」を「他者と交流」させるという過程を経ることによって、培うことができたと言えよう。

二　『道具と文化』（河合雅雄）

左は、『道具と文化』（河合雅雄）における生徒のノート記述である。

①の部分には筆者の考えに対する、自分の意見が書かれている。



テクストを読んで生み出した自分の考えを簡潔に書かせる機会を繰り返し設けることによって、「論理的に表現する力」を育てている。

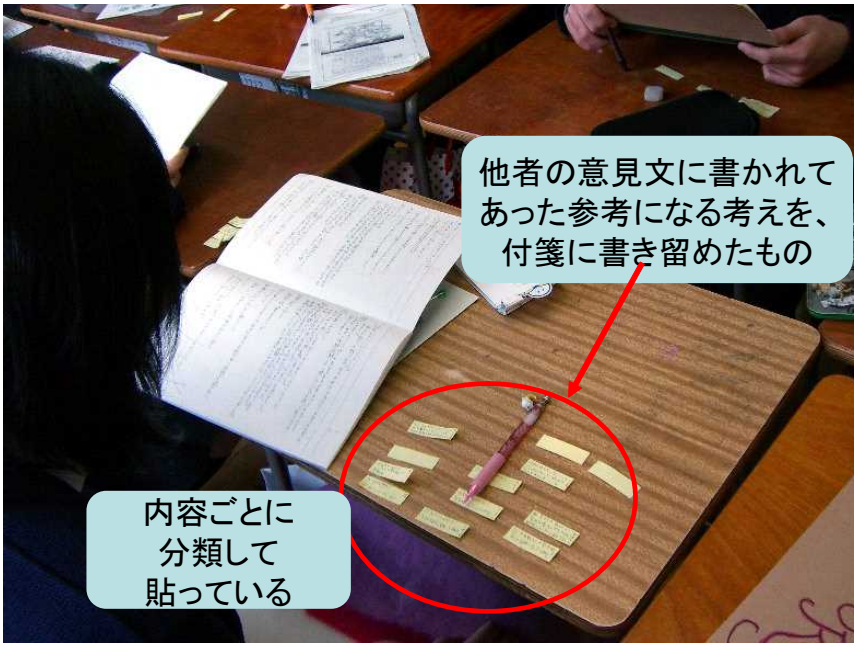
②の部分には、ノート回覧時にもらった自分の意見文に対する他者からのコメントが書かれてある付箋が貼り付けてある。

③の部分には、ノート回覧中に他者の意見文を読んで考えたことを書き留めた付箋が貼り付けられている。

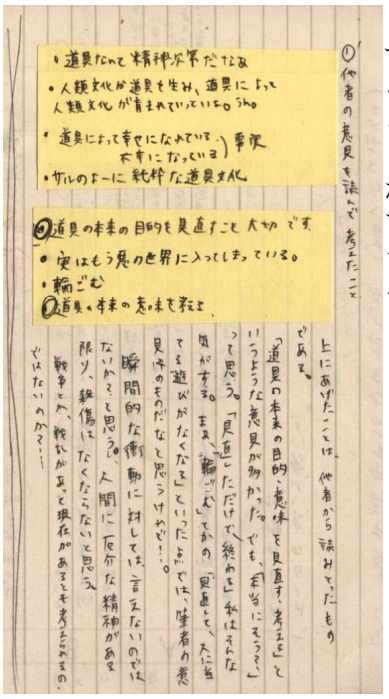
右の写真は、ノート回覧中の様子である。まず生徒たちは、その意見文に対するコメ

ントを付箋に書き、そのノートに貼り付ける。

さらに、その意見文の中で参考になる考えがあれば、付箋に書き留め、あとで自分のノートに貼り付ける。



右の写真の生徒は、最初の段階では書いた順番にただ貼り付けていただけであったが、途中からは自分の書いた付箋を、内容ごとに分類して机に貼り付けていた。付箋を用いれば、一旦書いたものを分類・整理することができる。



右は、③「他者の意見文を読んで考えたことを書き留めた付箋」が貼り付けられている部分を拡大したものである。

この生徒は付箋を貼り付けた下の部分に、他者の意見を読んで自分自身が考えたことを書いている。

> 「道具の本来の目的・意味を見直す・考える」というような意見が多かった。でも「本当にそう？」って思う。「見直しただけで終わる。」私はそんな気がする。

多くの生徒が書いた「道具本来の意味・目的を見直す」という筆者の主張に沿った意見に対して、それだけでは問題の解決につながらないことを、この生徒は指摘している。

このようにして、他者との交流を通して考えたことをノートに整理していく過程を経ることによって、生徒一人ひとりの考えが深まっていく。

以上の過程を経て再度作成した意見文が最後に書かれている。

> 筆者は「人類はなぜ道具を必要としたのかという原点に対する深い省察がなければ、道具は地獄への道作りの具となるだろう」と言っている。（中略）
>
> ただ、「地獄への道作り」の具になるのを防ぐための「省察」。これがあっても、「地獄への道作り」が無くなるわけではないと思う。人の「妬み」とか「悪意」とか・・・。そんな精神は、犯罪と隣り合わせだし、道具の意味を考える前に、その場での自分の精神が先走ってしまうもの。だから、道具に対して省察しても効果はないと思う。

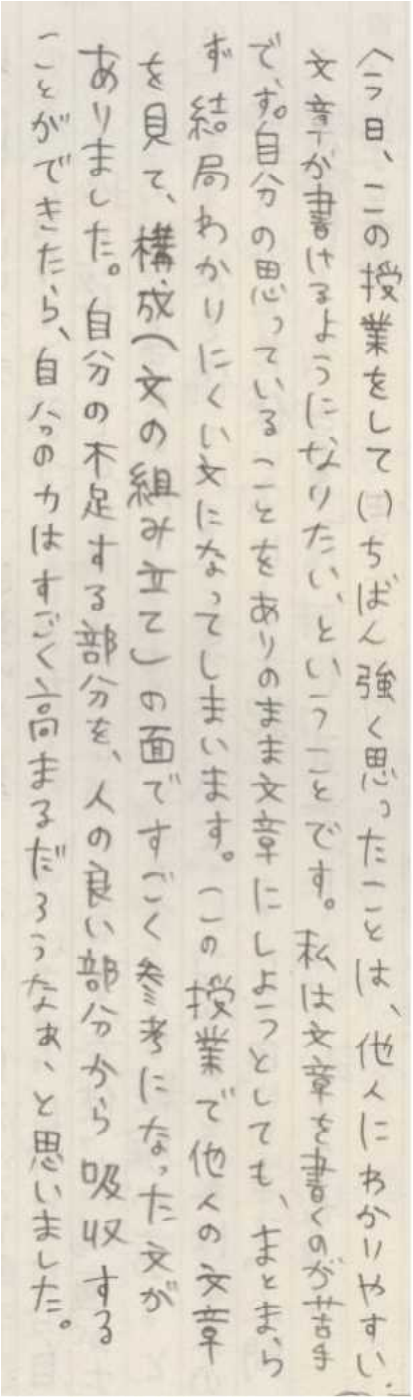
前時間に書いた意見文(①の部分)においても、「道具に対して省察しても効果はない」という主張がなされていたが、その根拠は書かれていなかった。

しかし、再度作成された意見文(④の部分)においては、根拠を挙げて(波線部)主張を述べている。

他者との交流を通して考えたことをノートに整理していく過程を通して、根拠を挙げて自分自身の主張を展開することができるようになった、と言えよう。

おわりに

左に示したノート記述は、この授業を行った後に生徒が書いた「学習の振り返り」である。ここには、


(二日、この授業をして(一)ちばん強く思ったことは、他人にわかりやすい文章が書けるようになりたい、ということです。私は文章を書くのが苦手で、自分の思っていることをありのまま文章にしようとしても、まとまらず結局わかりにくい文になってしまいます。この授業で他人の文章を見て、構成(文の組み立て)の面ですごく参考になった文がありました。自分の不足する部分を、人の良い部分から吸収することができたら、自分の力はすごく高まるだろうなあ、と思いました。

- 「他人にわかりやすい文章が書けるようになりたい」という意欲がわいてきたこと。
- 他者の文章構成が参考になったこと。
- 他者から学ぶことが自分の力を高めることにつながる、と自覚したこと。

が述べられている。

「論理的に表現する力」を育成するためには、「自分の考え」を表現させ、「他者と交流させる」ことが有効であることを、この生徒記述が示唆していると言えよう。

今後、更なる研究を深めていきたい。

学校長　古谷活也

(文責　教諭　渡邉久暢)